
夏とテスト。ついでに花火の思い出。

・・・暴走したのを恥ずいけど貼る。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏とテスト。ついでに花火の思い出。

【Nコード】

N9409T

【作者名】

・・・暴走したのを恥ずいけど貼る。

【あらすじ】

テストが嫌で嫌で、テスト前日（というか当日の早朝）に作った。まだ後悔はしていない。する予定。

（前書き）

テストとリア充を天秤にかけたらこんな作品が出来上がりました。
テスト嫌いです。

カンカンと照りつける太陽。

まだ7月の頭だというのに、どうやら松岡 造あたりが地球防衛軍にでも入ったらしい。温暖化が尋常じゃない。

俺は食べ終えたアイスの棒を咥えて、暑苦しくて青い空を眺めた。そのとき、ひんやりとした気持ちのいい感触が首筋に伝わる。

「ふえ？」

後ろを振り返るとコーラの缶を二つ持った彼女がいた。

「ほら、期末テスト、勉強しなくていいの？」

「うーん、しばらくこうしてる。勉強は後でいいだろ」

すると彼女は、コーラを一本投げ渡してきた。

「勉強しないといい高校いけないよ？ 私たち三年生なんだから、ちゃんと考えないとね！」

やけに張り切っている彼女を眺めながら、冷たいのかぬるいのかわからないコーラを飲む。

「勉強勉強って、お前は相変わらずだな。せっかく部活が休みなんだから、のんびり行こうぜ」

「うっん！ 勉強も部活も私生活も楽しむのだ！」

昔から1mmも変わることもなく、彼女は無駄に有り余る元気を精一杯外にふりまきながら言った。

それは、岡修三ではなく、夏の始まりを連想させるような暑苦しさだった……。

いや、さっき修 で夏が始まったみたいなこと言ってたな……。

昼飯はソーめんだった。あの味が無い麺は実に微妙で、夏の風物詩だった。

そんなときも彼女は俺の近くにいた。

「なあ、たしかに俺とお前は幼なじみだ」

「うん！」

幼なじみだ、最悪の。

「だがな？ 無許可で人の家上がりこむのは法律で禁止されているんだ、分かったか？」

「ううん！」

「いや、そこは分かってるな！？」

「ううん！」

相変わらず漫才みたいなやりとりをしていると、彼女の目の下に、隈があるのを見つけた。

太陽みたく年がら年中元気があって、落ち着きがない彼女に、隈なんか似合わなかった。まるで向日葵にハエでもいるかのような、なんだか取り除きたい気分。

顔色も心なしがあまりよくなさげ。

「……オイ、大丈夫か？ 目の下に隈出来てるぞ？」

「うう……うん！」

「どっちだよ」

「だいじょーぶだよ！ 私の心配よりも、君はちゃんと勉強してなさい！ 明日テストなんだから！」

「……ごもつともです」

これ以上の追求はよそう。いい方向に進まないのは眼に見えている。

それにさっさと勉強しないとヤバイだろうし。

テスト前日、夜。

今夜は熱帯夜のように、夜になってもその熱は暫く冷めないらしい。

勉強のしすぎでくたくたになった頭を冷やすため、俺はコンビニをうろついていた。

「だりい……」

そもそも俺の勉強部屋にクーラーがないので、窓全開にしているのだがそれでもまだ暑い。

しばらくしていればかなり涼しくなるのだが、そのしばらくですら生き残れる自信がない。

急に、誰かに肩を叩かれた。

「偶然だね！　こんなところで会えるなんてさ！」

「家近いし、オマエが勉強しろつつったんだろうが」

「まあいいじゃない。おおっ……」

軽くよろめいた彼女を、俺はしっかりと受け止める。

目の下の隈は濃くなっていた。

「オイオイ……家帰ったら即効で寝ろよ？」

「わかってるよ……。じゃーさ、目、つむって」

言われるがままに目をつむる。

すると、額にひんやりとした感触。

目を開けたくなる衝動を押さえて、ずっと目をつぶっている。

五分ぐらいしてから開けると、彼女はどこかへ消えていた。

「……風邪、移されたかな」

念のため、と思い風邪薬をレジへ持っていった。

12:40テスト一日目終了。

徹夜&もう勉強の俺にはもうテストを受けるくらいの体力しか残っていないかった。

と、いつかテストすらまともに受けられない状況下ですべて受けられたことを褒めて欲しいくらいだ。

だが、

肝心の褒めて欲しい相手が居ない。

うすうす気づいていたが、テストのせいで忘れかけていた。

朝から彼女が居ない。

そう思った瞬間走りだしていた。

走って走って、商店街を必死に駆け抜けた。

彼女の家は確か商店街の八百屋。俺と同じで学校からはさして遠くなかったはず。

そして、八百屋の前にたどり着いた。

「おばちゃん！ あいつは？」

「ああ、体壊して裏で寝てるよ。だーから手伝いなんかしなくてもいいって言つたのに……」

おばちゃんの話半分くらい聴き捨てて、さっさと奥へ向かう。

階段を上がってドアを開けると、そこには座って空を見上げる彼女の姿があった。

そつと後ろから近寄っていつて、肩を叩いた。

「おわ！？」

「バカ。心配かけさせんなよ」

そう言つて、そのへんで昨日買ってきた風邪薬を押し付ける。

「オマエのことだろうから、また『登校と店番ができない状態なだけ』とは思つてないんだろ？」

「ち、違ふよ！」

「嘘つけ、じゃあその勉強道具は何だ」

「そ、それはあの……、もっと勉強しないと君と同じ高校なんか行けないし……」

ぼそぼそと彼女がなにか言つたが、焦っていた俺にはあまり聞こえなかった。

「とにかく、病人は寝てる。俺がなんか昼飯作つてやつから」

「いい……、私が……」

「アホか、まともに立てねーヤツが台所行くな、危ないわ」

「わた……私を心配してくれてるの？」

「病気で脳でもやられたのか？ 罵声で心配してるよーに聞こえたらそれは耳鼻科か脳外科行つて来い」

そんな捨て台詞を残して、台所へと向かう。

おばちゃんが外で店番しているとところを見ると「昼ごはんは大丈夫だから」とでも言つたのだろう。

「おばちゃん、土鍋借りるねー」

返事を聞かずに、土鍋でおかゆを焚きながらネギを刻む。
長ネギを刻んでいる間、色々な言葉が頭を駆け巡った。

部活、勉強、私生活、それに店番までやってやがったのか
たまには人の話を聞け。

心配だから、あんまり無理するな

最後のセリフがバカップルみだったので、思わず吹き出しそうになった。と、ちょうどその時土鍋が吹き出した。

適当にネギ、卵、醤油を入れ、混ぜて完成。

その場でよそうのが面倒だったので、茶碗と箸こと上の階へ持っていく。

「ほれ」

「ありがとー！」

どこからでてきたのか、すこし元気になっていた。

彼女がはむはむとおかゆを食べ終わると、

「お休みー」

「寝るな！」

「ほへ？　なんで？」

「薬飲め！」

「自分でどうにかするもん！」

「さっさと直して追試するんだろ？　自分の力より製薬会社の力使え。自分はその後のテストに集中しろ」

「で、でもさ……」

「なんだ？」

「じゃ、じゃあねるまででいいからずっと側にいてよ……」
消え入りそうな細かい声で彼女はそういった。

だが、すぐに顔を赤らめて

「や、やつぱいい。きょうはありがと」

「ま、安静に寝るまで見といてやるか。ちゃんと寝ろよ？」

「わかってるわよ……」

布団に入り込む彼女は、とても動揺しているように見えた。

目が覚めると、彼女の部屋だった。

夕日が沈みかけているところを見ると、一緒に寝ちまったのだらう。

ふと携帯を見ると、親父からのメール。

『件名：花火やるから！』

本文：今日、勤務地の空きグラウンドからあと30分でゲリラ花火を打ち上げる！

一応街のどこからでも見えるが、一番のポイントは河川敷だ！

息子よ、見に来い！　そして俺の如く花の散るさまを目の当たりにしろ！』

うちの親父はまあまあ大きい会社の子会社の社長。

やることなすことが突飛すぎてこのへんまで飛ばされてきたとか。

……アホ親父、今度は超フライングの花火かよ。

ほかにオマエの花は散ってないだろ腐り落ちてるだろとか色々言いたいことはあったが、

なんとなく、俺の体を突き動かすものがあつた。

「起きろー」

目の前の彼女の頬を軽く叩き、目を覚まさせる。

「なに？　なんかあつたの……？」

「ちよつと一緒にいてきてくれないか？」

彼女の手を引っ張り、家を出た。

時計とメールの送信時刻を見比べると、花火は後5分。走れば間に合う時間だ。

「走るぞ！」

「なんで走るの！？　私風邪引いてるんだよ！？」

「間に合わない……、なにかすぐ後悔すると思うんだ」
そして俺達は走った。

河川敷。

息も切れ切れに河川敷にたどり着いた。まだ始まっていない……のだろう。しん、と当たりが静まり返ってる。

「で、何も無いじゃない？」

「いや……あとちょっと。なにか話す？」

話す内容がなく、しばし沈黙が訪れた。

そして、最初に切り出したのは彼女だった。

「あのさ……、高校どこいくの？」

「あ？ ああ、南」

「南高行くの！？ そ、そんなに頭良かったっけ？」

「いや、ちよつと頑張ればどうにか入れるくらいのレベル。でも、親父が選んだだけであんま気乗りはしない」

「なんで？」

「オマエと一緒に高校行きたいから」

「ふえ！？ え？ わ、私は君と同じ高校に行きたかったんだけどさ……」

「また、どーしてだよ」

「だって……、君のこと……『ドーン！』」

「お、始まったか、花火」

彼女はあっけに取られた顔でこちらをみている。

だが、その視線はやがて花火へと釘付けになった。

「綺麗……」

「だろ？ 親父は変だけど、やるからには一流なんだ」

自慢なのか良く分からないボケを交えながら、俺達は本心を晒す。
「あのさ、お前、焦んなくていいから。理由は知らないが、俺が目指してるのはかなりムズいぜ？ かなり勉強しなくちゃ行けない。でもな、体は壊すもんじゃねえ。それだと……お、俺が看病しなくちゃなんなくなるじゃねえか」

「そう」

「『そう』って……お前はなにが言いたくないのか？」

「そうね……、焦ってるよ？ でも、今だから、全部やろうとするの。若いうちにやっておかないと、大人になったらできなくなることだっていっぱいあるんだから。たとえば、こうやって……」

彼女は、頬にキスをした。俺の頬に。

「こんなとか？」

「シャレになんないからやめてくれ」

「いやあいやあ実際、君のことがs『ドーン！』あ、おっきい花火だね！」

花火の音にかき消された言葉が気になるが、気にしないで置く。

それが、今を楽しむ最高の方法だと信じて。

そして、花火もいよいよフィナーレ。一番でかい花火の音に合わせて、俺はこっそりと声を出した。

「俺も……、大好きだよ」

この日見た花火は、一生忘れることはないだろう。

（後書き）

使用BGM

ナツカゲ・幻想夜・

夏に忘れてきたものを思い出すような曲です。

こんにちは、友達です。

寝起きクオリティだとかかなりカオスなことになっていたので、ちいと修正しました。

元々、テストが嫌で嫌で（現在進行形）作ったものです。

寝起きジェバンニ（寝起き状態のまま構想開始から半日もかけずに作品制作）した所為でわりと辻褃合ってなかったりします。

そして後、一場面書きたいところを忘れた……。

by・友達。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9409t/>

夏とテスト。ついでに花火の思い出。

2011年6月10日00時58分発行